



文・写真 = 大川 砂由里 (写真家)
text & photos by Ohkawa Sayuri

「行けば行くほどいい仕事ができる」

現在、マラウイで熱帯果樹の栽培技術の普及に取り組むJICA専門家の小金丸梅夫さんは、国際協力歴35年のベテラン専門家。貧しい農民のために世界各地を渡り歩く彼が乗り越えてきた困難とは。

「見てみる、やったぜ！
と言えるまで」

首都リロングウェから車で15分ほどのチテゼ農業試験場。瀟洒なレンガ造りの研究室で小金丸梅夫さんは待っていてくれた。簡単なあいさつが済むと早々に敷地内の畑へ。かなり早足だが、話している間、少しも息を切らすことはない。

「あの三角の屋根がヤギ小屋です。その隣が飼料の倉庫。材料はすべて現地調達しました。これから子ヤギを20頭ほど購入して3〜4カ月飼育し、マーケットに売りに出します。1頭約2000MK(マラウイ・クワチヤ、約2000円)。年に3〜4回転として100頭ぐらいは出したいと考えています」

ヤギの餌は、育苗場を取り囲むようにして植えたマメ科植物の葉や小枝、これまでは捨てられることの多かった落花生の殻や茎葉が使われる。ヤギのふん尿は作物残渣やどこにもある雑草と混ぜ合わせて発酵させ、畑の肥料に利用される予定だ。「ここで作ったものには「みがい」がない」。



小金丸さん(左)から接木の指導を受けるチテゼ農業試験場のスタッフたち

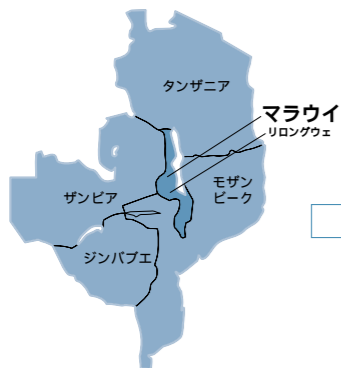
小金丸さんはもともと熱帯果樹の接木の専門家だ。接木は植え付けから収穫までの期間を早め、果実の商品価値を高めるといった生産性向上のために行われるが、小金丸さんのフィードバックはそこだけにとどまらない。「それだけじゃ面白くないので、家畜、果物、落花生やトウモロコシなどの一年性作物、牧草、マメ科植物などの緑肥と組み合わせ、安定した営農体系をつくる」としている。

「乾燥期の作付けと現金収入が困難なため、土地の生産性を上げ、農民が年間を通して安定した収入を得られることを目指している。良質の果物や野菜を作り、マーケットに出し、残った葉や茎などは家畜の餌にする。畜舎で集中管理された家畜は毎日貴重な副産物である有機肥料(ふん尿)を生産し、地力向上のため無駄なく畑に施用される。この作物と家畜の有機的連係の流れがうまく機能していくかどうか。『僕は機能すると思っているし、見てみる、やったぜ！』と言えるまで、ここでも動かないで居座ろうと思っているんです」。

国際協力で 世界を渡り歩く

小金丸さんは1949年に長崎県五島列島の最北端に近い、周囲4キロほどの六島に生まれた。幼いころから半農半漁を営む父と母の背中を見ながら自分も手伝いをするうちに、その作業がとてもしっくりなってきたという。

高校1年のとき、テレビ番組で、アメリカの平和部隊(ピー



Koganemaru Umeo

JICA 専門家 **小金丸 梅夫**

Stories of
Challengers
Vol.06

国際協力に大切なこと

1986年から4年間赴任したボリビア。当初、日本人移住者の中には、なぜマンゴーなどの果物栽培に取り組むのかと反対する人もいたという。しかし、実際に実った果物を見て、小金丸さんの仕事を認め、理解してくれた。大切なのは「誠実さと情熱。常にアンテナを張って新しい情報や知識、技術を蓄積して、どんな状況でも他国の成功事例を活用しながら周囲を説得し、言った通り実際に行動でやり抜くこと」。

現在、ラパスやサンタクルスの市場にはクリスマスシーズンになると(各種を総称して「マンゴー・コガネマル」が店先に並び始めるそう。『現地から毎年届くクリスマスカードには『今年も小金丸マンゴーが鈴なりになっていますよ』と。これを楽しみにしているんです』。

新しい発見やその活用連係づくりにはチャレンジしていけば、どこでも情熱の対象を見つけられる

農業開発のために赴任したペルーでは日本国大使公邸占拠事件に巻き込まれた。「彼ら(トウバク・アマール革命運動)は入ってきてすぐ、われわれはむやみに人を殺したりしない、と宣言しました。また、彼らの考えではペルーに国際協力が必要だということを感じ、近いうちに解放されるのではないかと思いついた。その翌日が2日後、援助関係者全員が解放されました。だが、その後帰国した小金丸さんにとって「ペルーでの仕事は不完全燃焼で未練もあった」。

半年のバナマ勤務の後、「誰も行く人がいないといわれていた」ナイジェリアへ。所長としてのデスクワークだけでは物足りず、チャド湖周辺の砂漠化対策と村

落開発のため、ペルー北部の海岸砂漠地帯に自生するマメ科植物「アルガローボ」の植え付けを提案。国立大学の教授らを巻き込んで作業が進められた。「将来的にはサハラ砂漠周縁地帯にアルガローボを大々的に植林して、砂漠化防止に取り組むのも大いに夢があつていいんじゃないのかな」。

“小金丸スペシャル”の仕事

「君はタフだよ」と言われて、着任したアフガニスタンでは、カンダハルの復興支援プロジェクトにかかわった。荒涼とした砂漠の中の灌漑可能地でとれる果物に魅せられた。特にメロンやブドウ、ザクロは甘く、大きな色も素晴らしい。そのアフガンザクロの種子250粒が、現在マラウイで元気に発芽



グアバの台木(接木の台にする木)だけで1,000本以上が並びチテゼ農業試験場の苗床。ほかにもレモンやジャックフルーツの台木がある。在来のアボカドやアフガンザクロの種も元気に生育している



ザクロを見せるカンダハルの子どもた女 撮影：大石芳野。小金丸さんは、ザクロをはじめ、灌漑農地でとれる見事な果実に魅せられた



チテゼ農業試験場の畑に植樹したマメ科のアカシアなどの木に水をやるスタッフ。マメ科の木は葉や枝がそのまま肥料になる。乾期が長いので根を張るまでの1、2年が難しい

し成長している。小金丸さんの自由な発想と豊かな視点はどこか芸術的でさえある。国際協力について「デザインを描けるようになったら、その新しい試みと方向性を現地の人に説明し、できれば感動的に納得させ、その実現の可能性をいかに共感してもらうかが重要」と語る。

今までの仕事を振り返り「いろいろな国の農民に指導しながら一緒に仕事をするのが、小金丸スペシャルだと思っているんです。これは最初から変わっていないし、実現できているのはとてもハッピーですね。何か新しい発見、その活用や連係をつくることにチャレンジしていけば、どこでもinterestingでexcitingな情熱の対象が見つけれれる。それがまた新しいエネルギーになって、次の場所でもそれまでの経験を総動員できるじゃないですか。だから、行けば行くほどいい仕事ができる。本当にそういう気がします」。

あと3年余りで定年を迎える小金丸さん。その後のことを聞くと、「ふるさとの島は無人島になりそうだから、帰って島おこしに転向しようかと思って。そこからNGOなどの短期間の仕事で、また途上国へ飛び出して行ってもいいね」と朗らかに笑った。

スコア)の訓練風景を見て、「これだ、俺の仕事は」と確信した。そしてその夢を農業の分野でかなえたいという思いから、東京農業大学へ進学。鹿児島、静岡、群馬、長野、在学中は日本各地で農業実習を盛んに行った。さらにアメリカの酪農家で1年間の農業実習、台湾で1カ月の熱帯農業研修も経験した。

職種と条件が合わず断念。海外農業開発財団の留学プログラムで1年間、メキシコで語学研修と農業試験場での熱帯農業研修を受けた。当時はインターネットなどない時代。「山奥でボランティア活動みたいなこともやりながら、月に一度は大きな市場で魚や野菜、果物をよく見ていました。その時期にその国・地域でどういう農作物が栽培されているかが分かるんです。農業

の生きた情報がいっぱいあるわけですよ。そのうち売り子のセニョリータやおばちゃんと話すようになり、こっちはたどたどしいスペイン語で野菜の名前を聞いたたり、メモをとったりね。彼女たちも忙しいのに日本の青年が一生懸命やっているのを見て、年が一生懸命やってくれるんだよ。作物の名前から収穫の時期、地域、それが生きた情報。そうしたらそこへ実際に行つて畑を見て、農

家の人に直接質問ができる。そういうやり方だった。私はね。あのころは」。

戦前に移住した日本人と出会い、熱帯果樹の接木の技術を初めて教えてもらったのもメキシコの地だった。

その後も南米、アフリカ、アジアで数々の出会いと国際協力の経験を積み重ねてきた。80、83年に滞在したブラジルでは、5万ヘクタールの原野で300、400人の入植者とともに大豆や小麦、畜産などの大規模農業開発に携わった。乾期には現地アシスタントと毎週のように巨大魚を釣りに行き、みそ汁にして振る舞うなど交流を深めた。ボリビアでは日本人移住地の農業を安定させるためには何が必要か考えた。当時、ボリビアには熱帯果樹の優良品種がほとんどなく、自分の仕事だと直感した。以前滞在中、果物の種類や品質も知っていたブラジルやメキシコ、ハワイまで赴き、マンゴーやグアバ、マガダミアナツツの穂木(接木用に切り取った枝)を持ち帰って移住地内のJICA直営の農業試験場で接木し、大きな成果を上げることになった。

教育や農業などの分野での途上国援助を目的とするアメリカ政府の長期ボランティア派遣プログラム。

Koganemaru Umeo

こがねまる・うめお JICA専門家。1949年長崎県出身。72年東京農業大学卒業後、海外農業開発財団に就職。77年国際協力事業団(現国際協力機構)入団。JICA専門家として、ブラジル(80-83年)、ボリビア(86-90年)、ペルー(95-97年、ペルー政府大統領援助調整アドバイザー)、バナマ(99年)で、農業開発や森林保全のプロジェクトにかかわる。また、2000-03年JICAナイジェリア事務所長を務め、03-04年JICA企画調査員としてアフガニスタン・JICAカンダハル連絡所に赴任。04年9月からJICA専門家としてマラウイへ。